

金子昌熙著

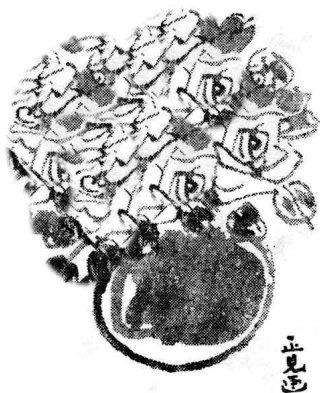
愛と人生の俳句

洋々社刊

愛と人生の俳句

HAIKU POEMS OF LOVE & LIFE

金子昌熙著



洋々社

金子昌熙 (かねこ まさひろ)
1936 仙台市に生まれる
東北学院大学英文科卒業
東北大学文学部研究生
俳誌「好日」前同人
1964 好日賞次席受賞
東北学院大学二部に文芸部を創設
「緑虹」創刊
著書 句集「栄光唱」
「戦後の俳句をどう読むか」など
現住所 〒989-31 宮城県宮城郡宮城町
上愛子字松原16の1
電話 (022386)2325

愛と人生の俳句
Haiku Poems of Love & Life

昭和49年9月1日 印刷
昭和49年9月10日 発行

定価1200円



著者 金子昌熙
発行者 梅田鉄夫
印刷 弘済印刷
製本 洋々社
発行所 洋々社

〒162 東京都新宿区納戸町5番地
電話 (03) 268-0796
振替 東京 131515

乱丁・落丁はお取替えします
© Masahiro Kaneko 1974



紹介の辞

金子兜太

著者には六年前に、『戦後の俳句をどう読むか』の著述があつて、その冒頭に、「詩や小説を王冠の華やかさに喩えるならば、俳句は黒いビロードにこぼした一顆の真珠の美しさ」だと言ひあつたのを思いだす。

俳句という伝統の、しかも最短定型の詩形に傾ける生一本な愛着を知ることができる。その愛着を執拗に温めつづけて、いま、この現代俳句の鑑賞集をまとめあげたわけである。むろん、これからも、さらに愛着の成果を示すにちがいない。

著者は、東北の地宮城県で教職にある篤学の人で、英文学を専攻している。しかし、自ら「私は復古主義者でも、単なる欧米文化の礼讃者でもない。祖国の伝統文化と他国のよき文化とを止揚して明日へ強く生きる現代人でありたいと思うのである」と、いささか気張つて書いているように、その消化をわが国の伝統詩形を通じてはかっているのである。古典俳諧でなく、現代俳句を対象にしている理由もそこにあるう。

私は数年前に一度、著者に会っている。『戦後の俳句をどう読むか』が出て間もないときで、私たちは、松島湾を走る遊覧船のなかに並んで腰かけていて、大いに喋つたものだ。その本が双

方の意見の橋渡しの役をしていたわけで、私の批評と彼の説明で話はとぎれることもなく、旧知のような感じだった。

そのときの印象は、東北の人らしい朴訥な語り口のなかに、ひどく粗いところと、なかなかカンのよいところがあって、カンが働いているところにくると、おどろくほど能弁になる、ということだった。だから、その評論には、新規なものに鋭敏すぎて、現象的になりかねない心配があるとともに、盲蛇におどろく式の嗅覚のなまなましい鮮度を発揮するかもしれない、という期待があった。

今回の『愛と人生の俳句』という、一見稚拙な着眼も、俳句を天然（外なる自然）に随順させてゆく、いわゆる伝承俳句的視点を、もろに人間の世界におこうとする現代俳句的視点に置きかえたもので、稚拙さは、そのまま鮮度の保証でもあるわけだった。そこには、粗い設題とともに、なまなましい嗅覚が働いていて、人によっては、その粗さ、生ぐささに辟易するかもしれない。

私のみるところ、俳句作品の選択がまだまだ総花的で、十分とはいえないし、たとえば、「俳句には、季語ないしは、季感を表わす言葉が詠み込まれていることが原則であること」といった俳句観は、伝承盲従にきびしく批判的なこの人にしては、困るほど便宜的で妥協的なのである。へ今までは、詠みこまれているのが普通だったぐらゐにするべきところだ。だいいち、「愛」

といつても、〈愛情〉描写を探るていどの鑑賞が多くて、エロスを、韻律と定型空間に読みとつてゆくほどの徹底ぶりには欠けるものがある。文章の肌理も細密とはいえない。

そういう欠点を挙げればきりはない。しかし、俳句鑑賞の書はまことに多いが、おおかたが、当たりさわりのない〈お鑑賞〉にとどまっている現今、この書のように、一本の主題を押し立てて、現代俳句の未来を先取りしかねない勢いで書かれたものには、なんといつても若さがある。生きのよさがある。

だから、おおぜいが読んで、叩き台にして、大いに語り合うのに格好の書、といつてもよい。そんな図々しさと若さが、この書の特徴といつてもよい。

次

V

戦	争		三六
別	離		三七五
生	別		
死	別		
参	考文	献	
			四一
作	家名	索引	
			四七
あ	とが	き	
			四九
扉	絵		
		沼倉正見	
カ	ット	竹谷喜久世	

俳句鑑賞の手引き

俳句を詠んだり鑑賞したいと思うが、どうも難しくて手がでない、という声をしばしば耳にします。そこで、俳句鑑賞の最小限の知識を伝授したいと思います。

俳句は、十七音の詩とか十七拍音の詩などといわれますが、それは、五音七音五音のリズムをもって表現されたものが比較的多いからです。しかし、五七五音からできた作品が、そのまま俳句とはいえません。なぜならば、俳句と同様な表現型式をとっている「川柳」との区別がつかないからです。ではこの川柳との区別はどこにあるかというと、川柳は、しゃれ・ひにく・滑稽・人情・風俗をテーマに、風刺的に表現するのが特徴です。つまり、川柳の作句態度は、傍観的・客観的に表現しようとしています。それにひきかえ俳句は、主観的・特殊的・非合理（非論理的）に表現します。これは俳句ばかりでなく、文芸の特質といえます。

もう一つ、俳句の特質に、歴史的流れをくむ俳句のほとんどは、「季語」とか「季題」とかいわれる季節を表わす言葉を俳句に詠み込むことがならわしになっています。この季語の働きは、

俳句の製作状況のアリバイや時候を知らせ、短い俳句に広い背景を提供して、作品の内容を豊かにしてくれます。

俳句は五七五音、ないしは、それに近いリズムの構成を有し、季語を一句におり込み、文芸の特質ともいべき主観的で特殊的な題材や内容を詠う詩型といえましょう。

さて、俳句のリズムについて例句を引いて説明しましょう。

五音(上五)

七音(中七)

五音(下五)

吾子が吸うミルクの黴よ妻なき日

七音

七音

五音

谷は夕焼子は湯あがりの髪ぬれて

長谷川素逝

源 十三夜

一句めは音律の上では五七五音の定型俳句で、二句めは七七五音で「字余り」の句で、破格の句といわれます。二句めの作品は、「タニハユウヤケ」が七音で二音ふえているわけですが、一氣に読むと、リズムのくずれが気にならないと思います。

また、俳句には、音拍的なリズムばかりでなく、音の繰返しがあります。この「谷は夕焼」の句では、「谷は」と「子は」の「ワ」音、それから「夕焼」と「湯」の「ユ」音の繰返しは、読む者に心よいリズムを与えてくれます。このようなリズムをもう少し詳しく知りたい方は、俳句

をローマ字に書き直して、母音・子音の配列のしくみを観察してください。

次に、季語について説明しましょう。

例に引いた源十三夜氏の作品は、季語がない俳句で「無季俳句」と呼ばれているものです。冒頭で、俳句には季語を一つおり込むことと述べておきましたが、この句は、俳句になっていないのではないかと疑問をもたれる方もありましょう。このことについて、ここで詳しく述べるいともありませんので、多くの鑑賞文の中から、そのわけを見い出していきたいと思えます。

二句めの「谷は夕焼」の句には、立派に季語があります。「夕焼」がそれで、季節は「夏」です。この句では、この夕焼が、作者の作句時刻と場所を明示してくれています。そこで、読者の私たちは、作者の伝えようとしている情景や意味を追体験しようとしています。つまり、「夕焼」の情景を背景に、子の湯あがり姿、谷間の風景などを想像して、作者のとらえた詩情を、言葉をなかだちにして再現しようとするわけなのです。

俳句において季語は、明確なイメージ（心の中に描く絵画的世界）を読者に伝える一つの手段といえます。一句めの源十三夜氏のような無季俳句にも、季語の働きに代わりうる強烈なイメージを呼びさます言葉が含まれていれば、作品がなりたつ理屈になります。こういう考えから作句を続けている一派に、無季定型、自由律、口語俳句の諸作家がおり、本書では、これらの作家たちの作品を多数集録しましたので、鑑賞の際注意していただきたいと思います。

以上、俳句のリズムと季語の働きを一言で説明しましたが、今度は、俳句の解釈をどのような方法で進めてゆくか、その方法を説明してみましよう。

俳句の解釈で一番たいせつなことは、「切れ字」を見つけることです。「切れ字」は俳句独特のもので、文章にたとえれば、文章の解釈を容易にする句読点に値するものといえましよう。つまり「切れ字」は、俳句の意味の段落を示してくれるものです。

「切れ字」の代表的なものは、「や」「かな」「けり」などで、このような「切れ字」を見つけるのは容易ですが、現代の俳句は、このような歴史的な切れ字をあまり使わなくなってきました。しかし、現代俳句にも切れ字が示すような段落は明らかに存続しています。まず、「切れ字」のある作品をあげてみましょう。

虫きくやまさぐる乳房児にまかせ

藤森春泉

合歡の花がつづる旅路や子の睫毛

細見綾子

夜長の灯消せば覚めゐて否む子よ

滝春一

右の句で示した傍線の個所が切れ字で、一句めからそれぞれ、「初句切れ（二句切れ）」「中句切れ（二句切れ）」「三句切れ」と呼ばれ、冒頭の五音で切れるもの、七音で切れるもの、結句で切れるものの三とおりがあります。

たいていの俳句は、このように上（かみ）五音、中（なか）七音、下（しも）五音の三か所のいずれかで切れるのがふつうです。しかし、例句のように、判で押したような作品ばかりではないので、代表的な切れ字が使用されていない時は、読者の私たちは、切れ字と同じ働きをしている言葉を探し出さなければなりません。これは簡単のようでありたいへん難しい仕事です。永年俳句を詠みかつ鑑賞や批評をしてきた方でも、誤ることが多々あるものです。

例を引いて、意味上の段落を見つけてみましょう。

藤の昼・膝やはらかくひとに逢ふ

桂 信子

霧がつゝむともしびの紅・恋しかり

金子昌熙

秋の夜の君のすべてがなつかしき。

宮本たか子

例にあげた三句の・印が切れ字と同様な働きをしており、そこに段落があり、かぎりない省略があるのです。一句めは「藤の花が咲いている夏の真昼に」の「に」が省略されているといえます。あるいは、中七音の「膝やはらく」の下に段落があるとも考えられます。このように段落を見つけることがそう容易でないことが、おわかりになられたと思います。

一句めは、上五音か中七音で切ってもそう意味に変化をきたしません。二句めの拙作では、上五の「露がつゝむ」で切ったとすると、全然作意が違ってきます。上五で切ると、恋しい対象物は「紅いとしび」となります。中七で切ると、上五中七までは、恋しい対象物を詠むための序詞のような働きをしているにすぎないことがわかります。つまり、霧が村や町の紅い灯火をしないでいつつんでゆきます。そのような情景のもとで、作者はある恋しい人への思いをつのらせるという句になります。

三句めは、最後で切れる句で、途中に切れ字も段落もない句です。このような詠みぶりの句には、ゆったりした重みのある句が多いようです。

俳句を鑑賞する際は、切れ字や段落を正確に見つけ出したいと思っています。

今までは、俳句の型式的な特徴を述べてきましたが、最後に、表現技法や内容について触れてみましょう。

東の間の寒の三日月逢ひたけれ

高垣憲正

妻病みて髪切虫の鳴くと言ふ

加倉井秋を

前句の「の」は文法的には格助詞でも、体言を修飾する「の」で、後句の「の」は、主格を表わす「の」です。俳句を巧みに詠むには、この助詞「の」をいかに上手に用いるかにかかっているともいえるほどです。また、方向や位置を示す「を」「に」の助詞の正しい意味を知っておくこともたいせつなことです。

今日とみに、俳句の象徴性というものが論じられてきていますが、短い俳句は必然的にこのような傾向をたどらざるをえません。一語一語に、深い意味を担わせ、二重、三重の意味やイメージをもたせようとしています。このような傾向を極度に押し進めた一派が、今日の前衛俳句といってもあやまりではないでしょう。彼らは、比喩とか象徴とかいう表現技法を盛んに用いています。

比喩と象徴を俳人仲間では、ごちゃごちゃに用いている人もいますが、比喩はあくまで、喩（たと）えるものと喩えられるものが存在し、「AはBの如し」「AはBである」というのが

形式的な規定の仕方です。

雪は夜^Aのほろびのことば灯^Bへ

金子昌熙

娶りたし枯野に青き川流れ

前句は、拙作で少々難解でしょうが比喻の手法です。後句は、象徴的な表現の勝った作品で、嫁をほしと思っているが、相手がいないのか、事情や障害があつてか、実現できないでいる様子。「枯野」はきびしい現実を、「青」は青年の潔癖性、「川流れ」は人生行路を意味しており、みごとに象徴句です。なお、後句の作者名を失念して記すことができないのが残念です。

以上、とりとめもなく述べてきましたが、要約してまとめると、①俳句は、五七五音ないしはそれに近い音節からなっていること、②俳句には、季語ないしは、季感を表わす言葉が詠み込まれていることが原則であること、③切れ字や段落があること、④表現技法として、巧みに助詞を使うこと、⑤比喻や象徴が主要な表現形式になっていること、などを正しく理解することが、俳句読のキーポイントになっているといえましょう。

最後に、俳句の大きな特質を一言で述べますと、俳句は名詞・動詞・助詞・助動詞などからなる（自立語を主体にした）特異な表現型式をとる文芸であるといえましょう。

幼 年 期

